日本地球化学会ニュース
No. 223　December 2015

Contents

年会報告 2
「2015年度日本地球化学会第62回年会実施報告」
「第10回日本地球化学会・日本鉱物科学会合同ショートコース報告書」

学会からのお知らせ 10
長尾敬介会員の韓国での活躍：東亜日報に報道
第2回日中シンポジウム実施報告
日本地球化学若手シンポジウム2015実施報告
Goldschmidt国際会議2015参加報告
2016年度学会賞等受賞候補者推薦および第1回鳥居基金助成の募集

書評 15
「地球環境システム―温室効果気体と地球温暖化―」

年報報告

●2015年度日本地球化学会第62回年会実施報告

日本地球化学会年会実行委員会委員長
小林憲正（横浜国立大学大学院工学研究院）

2015年度日本地球化学会第62回年会は，9月16日（水）から18日（金）までの3日間，横浜国立大学常盤台キャンパスにおいて開催された。横浜国立大学における年会の開催は初めてであった。それに関連し，会期前日にショートコース，会期後に市民講演会が併せて開催された。全体を通しての日程は下記の通りである。

9月15日
第10回日本地球化学会ショートコース
主催：日本地球化学会
会場：横浜国立大学教育人間科学部講義棟7号館301室（F会場）

9月16～18日
日本地球化学会第62回年会
主催：日本地球化学会
共催：国立大学法人横浜国立大学，日本鉱物科学会，日本化学会，日本分析化学会，日本地質学会，日本質量分析学会
後援：公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー（YCVB）
会場：横浜国立大学教育人間科学部講義棟6号館・7号館，第一食堂（懇親会）

9月19日
日本地球化学会市民講演会「宇宙・海洋・生命―地球化学が読み解く生命誕生の謎―」
主催：日本地球化学会
共催：国立大学法人横浜国立大学
後援：公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー（YCVB）
会場：情報文化センター6階　情文ホール

年会開催に向けての準備
開催前年度（2014年度）の準備状況

2014年2月に，日本地球化学会より2015年度秋の第62回年会の会場として横浜国立大学を第一候補として開催準備を進めたいとの正式な協力要請が書面で小林憲正会員宛に届いた。これを受け，年会の開催に向けて学内で利用できる施設・設備の状況等を調査し，教育人間科学部講義棟を中心として開催する基本方針を立てた。4月に入り，横浜国立大学の小林憲正会員，津野宏会員，癸生川陽子会員で準備委員会を組織した。次いで，年会の日程が他の関連学会と重なってしまう問題を回避するために，関連する複数の学会の2015年度秋の年会の開催予定を調査した（4月半ばまで）。すでに決定されていた学会の日程を外したうえで，2015年度年会の日程を9月16～18日に開催することを会場校として決定し（5月2日には石橋企画幹事に日程案を報告），問い合わせをした関連学会関係者には地球化学会の日程（案）について情報を提供した。同時に，年会会場として使用を予定している建物について，会期および，準備日とショートコースの開催を考慮し，9月14～18日の使用予定で仮予約を行った。9月の第61会年会（富山大学）には，横浜国立大学より小林と津野が参加し，評議員会での準備状況の報告，総会の司会，懇親会・閉会式での挨拶を分担して行った。年会後，市民講演会の企画・会場の予約を行った上で，山本庶務幹事と連絡をとりながら，科学研究費研究公開促進費補助金の申請を行った（結果は不採択）。年が明けて2月の評議員会で準備状況を報告し，同時に年会業務の年会実行委員会（LOC）と評議員会との役割分担の確認を行った。

1. LOCは開催にかかわる実務を行う。
2. 基盤セッションの運営については評議員会の案件であり，特別セッションの公募については，企画幹事が行う。
3. 講演申し込み後のプログラム編纂はLOCが行う。
4. 学生発表賞の選考は評議員会で行う。ただし，表彰状の作成等については，当日対応できるようにLOCで準備する。
5. 共催学会への依頼は庶務幹事より行う。業務委託先の国際文献，出展企業との連絡はLOCが行う。

3月には公益財団法人横浜観光コンベンションビューローの横浜MICE応援プラン（横浜市における学会開催支援事業）に応募し，採用された。

開催年度（2015年度）の準備状況

開催年度である2015年度を迎えた4月1日に，国際文献社の担当者と横浜国大の小林，津野，癸生川とでWebシステム，要旨作成に関しての打ち合わせを

行った。前年度からの準備委員会としての3名に加えて，海洋開発研究機構の仙田量子会員，本多牧生会員，川口慎介会員，東京工業大学の青野真士氏，北台紀夫会員に加わっていただき，8名の年会LOCを組織した。5月13日に前年度LOCの富山大学の堀川恵司会員，評議員企画幹事の九州大学石橋純一郎会員を招き，年会LOC引き継ぎと第1回実行委員会を開催した（LOC全員が準備期間に集まっての会議は，講演申込締切り後の7月と合わせて2回開催）。堀川会員，石橋企画幹事には予定される会場を見ていただき，年会実施の経験を踏まえた助言をいただいた。それを受けて，教育人間科学部講義棟に会場を集約し，移動の少ない会場設営を行う方針を立てた。海洋研究開発機構の黒田潤一郎会員にご協力いただき，地球惑星科学連合大会での広報のために年会ポスターを作成した。黒田会員の力作のポスターは大変好評であり，年回当日にも各所に掲示を行うこととなった。以降，石橋企画幹事と密に連絡をとりながら，下記の通り年会会期までの運営を行った。

5月13日～5月27日　特別セッションの公募（石橋企画幹事よりMLに配信）

6月1日　基盤セッション（16），特別セッション（3）の構成が決定

6月5日　年会HP公開開始（LOCよりMLに配信）

6月8日　参加事前申込開始

6月12日　講演申込・要旨受付開始（LOCよりMLに配信）

7月16日　講演申込締め切り（1週間前より複数回，案内を配信）

7月18日　各セッションコンビーナーに申込情報を送り，プログラム作成依頼（22日締切）

8月7日　要旨集入稿

8月14日　プログラム速報版を年会HPで公開（LOCよりMLに配信）

8月28日　参加事前申込締め切り

9月7日　年会プログラム確定版と講演要旨を年会HPで公開
講演要旨をJ-stageで公開（LOCよりMLに配信）

プログラム編成に関する経緯と課題

講演申込は，当初，締切り7月16日14時としていたが，Web受付番号取得完了通知などの不着に関する問い合わせがあったことから，念のため，17時まで締切りの繰り下げを行った。講演申込の締切り後，直ちに，各セッションの申込内容を取りまとめ，各セッションコンビーナーに連絡し，口頭・ポスター発表の振り分け，口頭発表の順番の決定と希望する時間枠の検討を依頼した（22日まで）。コンビーナーからの回答をうけ，プログラム編成作業を行った。本年度年会の講演件数は303件，内訳は，口頭発表211件（このうち，招待・基調講演が30件），ポスター発表87件，受賞講演5件となった。

プログラム編成の基本方針は下記のようにして行った。

・ポスターは3日間の会期中常時掲示が可能とし，ポスター発表のコアタイムは同じセッションの口頭発表が行われる日の13時から14時30分（1時間30分）を割り当てる。
・口頭発表は，午前（9:00～12:00）・午後（14:30～17:30）とも3時間の時間枠を基本として，それを超える時間枠が必要なセッションは同日の午前午後で分割する。ただし，初日の午後のみ4時間程度までは組むことができる。他のイベント（会議，ランチョンセミナー，メンター懇親会）の予定が組まれている昼休みの時間を確保する。口頭発表の件数の制限は行わずに時間枠のみを示した上で，各コンビーナーに構成を依頼する。

口頭発表件数が確定したことにより，最大5会場を準備すれば構成できることとなった。特定の日付（時間帯）での開催希望や3時間をわずかに超えるセッションについては分割することが困難であるため，午前の開始時間を繰り上げることで対応した。また，3時間の時間枠内で休憩時間を考慮してもらうことを明記していなかったため，休憩が考慮して構成したセッションと休憩なしで3時間を構成したセッションがあった。最大限の調整は行ったが，いくつ休憩時間を確保することができないセッションが生じることになってしまった。LOCからコンビーナーに口頭発表の編成を依頼する際に，3時間枠をすべて使う場合には休憩時間を考慮することを明記する必要があると思われる。休憩の問題を除けば，各コンビーナーからの要望に従ったプログラム編成ができたと思われる。

プログラム編成作業と平行して，昨年度年会で問題になっていた，要旨原稿と申込システムで登録した共著者名・共著者数・発表題目の不一致の有無について確認を行った。J-stageへの登録，プログラム編纂の基礎データは申込システムで登録したものを用いるた

め，要旨原稿との齟齬は後々で問題が生じることから，要旨原稿の情報を正として，講演申込の登録情報を確認することにした。ただし，全件の突き合わせは膨大な作業となることから，国際文献社の担当者と相談の上，登録情報から情報の登録漏れの疑いがあるものを抽出し，要旨原稿と突き合わせた。抽出した登録データの多くが要旨の内容に齟齬があり，修正が必要となった。修正は各申込者個別の登録番号でシステムへのアクセスができるようにした上で，登録内容の修正を依頼した。あわせて，要旨の不備についても確認を行い，差し替えを依頼した。修正を依頼した案件として，要旨では共著としているにもかかわらず，学生が単著としてシステムに登録しているものが最も多く見受けられた。LOCの作業の軽減のためにも，指導教員の皆様には学生へのご指導をお願いしたい。講演申込のデータがJ-stage公開の基礎データとして使われるため，要旨集の印刷や年会プログラムの作成にのみ使われていた頃とは取り扱いが異なってきている。次年度以降，申込者への注意喚起を行うとともに，登録システムの改善を図る必要があると思われる。

年会ホームページの改善

国際文献社の担当者との打ち合わせの中で，講演申込フォームへの記入の不一致や記入漏れにより，プログラム編纂作業とその後の確認作業が膨大になるとの指摘があった。そこで，入力フォーム自体の再設計は困難であるとのことだったので，できるだけ確実に入力してもらえるように，注記や例などを見直し，可能な範囲での改善を行った。

年会HPの掲載内容に関しては，全体を見直し，現在の構造を維持したままで修正を加えた。特に，年会案内のページの充実を図り，会期中のイベントや会期前後の関連イベントの情報を集約した。関連イベントにはこれまで年会HPには掲載がなかった「地球化学若手シンポジウム」の情報とリンクを加えた。また，セッション案内のページには，一般講演者がセッションを選択する上での参考になるだろうとのことから，各セッションの招待講演・基調講演の情報を掲載するようにした。掲載した講演情報は，申込期間中の掲載であることから，事前にコンビーナーからの報告をもとに掲載し，適宜，コンビーナーからの連絡をもとに修正を加えた。本年は企業展示に合わせて，企業によるランチョンセミナーを募集したこともあり，企業展示・セミナーに関する情報を独立したタブとして作成した。また，要旨，および，年会ホームページに掲載した講演プログラムは，複数の会場間での移動の役に立つように，講演開始時刻をそろえてレイアウトするようにした。

会場

年会会場とした，教育人間科学部講義棟6号館，7号館は十分な数の講義室があることから，総会会場とは別に口頭発表の会場を5会場，すべてのポスターを3日間掲示できるポスター会場，セミナー会場，会議室を独立して設置することができた。企業展示室についても，講義棟7号館1階の学生実験室を利用することで，C会場とD会場に隣り合うことになり，参加者が立ち寄りやすい場所に設置することができたと思われる。セッション会場，総会，企業展示など，懇親会を除く年会に関わるすべてのイベントを隣接する2棟に集約することができ，コンパクトな会場配置となった。

一方，キャンパスまでの交通の便には恵まれておらず，横浜駅からバスの便に頼ることになるため，相鉄バスと交渉し，学内に乗り入れる路線バスを朝の時間帯に2便増便し，混雑緩和を図った。また，夜間集会，懇親会終了後には，学内乗り入れバスの最終便だけでは運送できないことから，借り上げのバスによる横浜駅までの直通バスを運行し，夜間集会後は有料，懇親会後は無料で参加者に利用してもらうことにした。

年会会期中の様子

今年度の年会参加者は，表1の通りの内訳で，総計441名を数えた。会期中は，残念ながら天候に恵まれず雨天となったが，会場が隣接していたこと，受付等を行うロービーのスペースが広かったことなどから，大きなトラブルは生じなかった。特に，初日の受付も，交通手段がバスに依存していることが功を奏したのか，参加者の到着が分散し，スムーズに受付ができたようであり，LOC一同，胸をなで下ろすことができた。

本年度は会期中に関連イベントが複数企画された。例年通り，関連企業（10件，11社）の展示会を開催したが，本年はセッション会場と休憩室に隣接した会場としたこともあり，参加者には気楽に立ち寄っていただけたようである。また，企業展示室では，50年会員顕彰が行われることを記念して，LOCの企画と

表1　2015年度　第62回地球化学会年会参加者.

	正会員	共催学会員	一般（会員外）	学生会員	一般学生（会員外）	名誉会員	50年会員	出展企業	学部生	合計
事前登録	188	13	40	66	36	2	7	35	0	387
当日登録	22	0	4	6	12	0	0	2	8	54
合計	210	13	44	72	48	2	7	37	8	441

注：事前登録の一般（会員外）には，招待講演者17名を含む。

して横浜国立大学の研究室に保管されている1953年から最近までの地球化学討論会・年会の要旨の展示をおこなった。企業展示に合わせて，ランチョンセミナーを正式に募集したところ，ジャスコインタナショナル株式会社とサーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社の応募があり，初日，2日目の昼休みにランチョンセミナーが開催された。それぞれ50名の定員であったが，それぞれ盛況であったとうかがっており，参加者に大いに貢献した会となったと思われる。この場を借りてお礼申し上げる。学会新企画として，地球化学メンター懇親会が2日目の昼休みに企画された。また，年会会期前日には「第10回日本地球化学会ショートコース」が年会F会場にて開催された（詳細はショートコース報告を参照）。

第1日目

会期初日には，1件の特別セッションと7件の基盤セッションが，5会場とポスター会場で開催された。昼休みには，サーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社によるランチョンセミナーがF会場で開催された。

すべてのセッションが終了した後，18時過ぎより夜間集会が開催された。夜間集会は「学会の将来を考える―来年のイベントから長期展望まで―」というテーマで開催され，60名ほどの参加者があり活発な議論が行われた。平田岳史会員（京都大）から，TF3「地球化学会の夢ロードマップ（2050年の将来に向けて）」についての話題提供があった。益田晴恵ゴールドシュミット2016 LOC委員長（大阪市大）からは，「ゴールドシュミット2016に向けて」と題して，現在の準備状況や課題の報告があり，広報ビデオが披露された。なお，この広報ビデオは2日目より休憩室のモニターで常時再生した（ただし，音声はなし）。また，山本鋼志副会長（名古屋大）からは，来年度の年会が，大阪市大（担当：益田）を会場として，名古屋大（担当：山本）が主な業務を担い，京都大（担当：平田）が懇親会などのイベントを行うといった分担による合同開催になることが紹介された。また，来年度の年会においては，例年行っていた要旨集の印刷は行わず，電子媒体（USBメモリスティックを予定）による配布を基本として，希望者には紙媒体を有償で提供する様にしたいとの提案があり，議論された。短い時間の中ではあったが，質疑応答や情報交換が活発に行われ，有意義な夜間集会となった。なお，会員同士の議論の活性化を期待し，また，1つの会場をのぞき，セッション終了後，夜間集会開催までの時間が空いてしまうことから，ここ数年取りやめていた夜間集会の会場での飲料の提供を有償で行った。

第2日目

会期2日目には，1件の特別セッションと4件の基盤セッションが口頭発表会場5会場とポスター会場で行われた。昼休み中には，ジャスコインタナショナル株式会社によるランチョンセミナーがF会場で開催された。また，休憩室を会場として，学会の新企画である第1回地球化学メンター懇親会が開催され，シニアと若手の交流の場が提供された。

午後は，ポスターセッション後の14時30分より，総会，特別集会，受賞記念講演会が，G会場において開催された。総会では，通常の議事に加えて，本年が第1回となる50年会員表彰が行われた。荒木匡会員，安藤厚会員，石原舜三会員，浦野隼臣会員，大森禎子会員，倉沢一会員，坂巻幸雄会員，柴田賢会員，白木敬一会員，鈴置哲朗会員，立川涼会員，長沢宏会員，吉田稔会員の13名の会員がこれまでの学会への貢献を顕彰された。顕彰を受けた会員諸氏のうち，石原会員，浦野会員，大森会員，柴田会員，鈴置会員，長沢会員が会場にお越しくださり，川幡穂高会長より50年会員証を受け，これまでを振り返り学会に対する思いや近況をお話しくださった。学問と学会への思いの深さに感銘を受けた（http://www.geochem.jp/information/info/2015/151013_1.html）。引き続き，本年

表2　懇親会参加者.

	一般	学生	企業	招待	計
事前登録	120	39	20	14	193
当日登録	15	5	2	1	23
計	135	44	22	14	215

度の各賞の授賞式が行われた。本年度の受賞者は，日本地球化学会賞が高橋嘉夫会員（東大），日本地球化学会奨励賞が服部祥平会員（東工大），藤谷渉会員（茨城大），癸生川陽子会員（横国大）板井啓明会員（愛媛大）であった（http://www.geochem.jp/information/info/2015/151013_2.html）。総会後，引き続き特別集会が開かれ，TF3「地球化学会の夢ロードマップ（2050年の将来に向けて）」が平田岳史会員（京都大学）より紹介された。その後，受賞記念講演会が行われ，多くの参加者が集まった。総会・受賞講演会の会場は358名収容の講義室であったが，立ち見が出るほどの盛況であった。

受賞講演会終了後の18時30分から，学内の第一食堂れんが館において懇親会を開催した。懇親会の参加者は215名（内訳は表2を参照）となり，盛況な会となった。冒頭，小林憲正年会実行委員長より開会の宣言があり，川幡穂高会長より，当地がご出身であることから横浜にちなんだ話が盛り込まれたご挨拶をいただいた。次いで，横浜国立大学長谷部勇一学長が開催校を代表して挨拶を行った。長谷部学長からは歴史のある学会でありながら，若手も多く活力を感じるとの話があった。小嶋稔名誉会員に乾杯の音頭をとっていただき，懇談となった。神奈川県内の地酒（川西屋酒造店，隆・丹沢山）や横浜中華街にちなみ紹興酒の瓶などを用意した。第一食堂れんが館の運営会社である日本栄養給食株式会社が大変張り切ってくれたことから，大変充実した料理・飲物を提供することができた。この場を借りてお礼を申し上げたい。特にステージでの余興などは行わなかったが，参加者同士の歓談の時間は瞬く間に過ぎていった。懇親会の席で，野尻幸宏副会長（弘前大）から，学会への新たな基金創設のための寄付のお願いがあった。会場にて寄付金を募ったところ，高額な寄付金の申し入れもあったとのことである。また，次期年会は大阪市立大学で開催されるが，合同開催となるため年会運営に携わる山本鋼志副会長（名古屋大），益田晴恵会員（大阪市大），平田岳史会員（京都大学）から挨拶をいただき，無事閉会となった。なお，懇親会と夜間集会で提供した飲料の残りは，会期後に開催される「地球化学若手シンポジウム」を盛り上げてもらうために，地球化学若手会に提供した。

第3日目

年会最終日は1件の特別セッション，4件の基盤セッションが4会場とポスター会場において開催された。最後の講演が終了した後に，C会場にて閉会式が行われた。閉会式は野尻幸宏副会長（弘前大）の進行で行われた。恒例となっている学生発表賞は齋藤陽介会員（学習院大），川角彰吾会員（岡山大），深井稜汰会員（東工大），横山築会員（九州大），伊藤茜会員（北海道大）が選ばれた。閉会式に出席した4名の受賞者には川幡会長から賞状が授与された（http://www.geochem.jp/information/info/2015/151019.html）。次期LOCの山本鋼志副会長（名古屋大）から，来年度の年会の紹介，小林憲正年会実行委員長から参加人数の報告と来場者へのお礼などがあり，川幡会長の挨拶により閉会となった。閉会式を含め，各イベントともに盛況であり，盛会のうちに年会を終えることができた。

市民講演会

9月19日には，横浜市内の情報文化センター6階情文ホールにおいて，日本地球化学会市民講演会「宇宙・海洋・生命―地球化学が読み解く生命誕生の謎―」を開催した。参加者は120名を数え，大変盛況な会となった。当日は，橘省吾会員（北海道大），高井研氏（海洋研究開発機構），山岸明彦氏（東京薬科大）による生命誕生の謎について，それぞれの視点からご講演をいただき，その後，小林憲正年会実行委員長（横国大）のコーディネートによるパネルディスカッションが行われた。また，川幡穂高会長が最後に地球化学の紹介を交えた話を閉会の挨拶として行っていただいた。各講演やパネルディスカッションの際には，会場からも質問が多く出て，関心の高さがうかがわれた。今回の市民講演会では，放送大学ICT活用・遠隔教育センターが提供するリアルタイム評価支援システム（REAS）を用いて，Web上での事前登録がおこなえるようにした。Webによる事前登録は前日までで90名の登録があった。事前登録フォームには，申込者の情報に加えて，講演者に対する質問の自由記述欄をつくったことで，参加者の疑問や関心を事前に把握することができ，パネルディスカッションに反映させることで，進行が円滑に進められたことに加え，参

加者の関心を集めることができたと思われる。市民講演会の開催にあたり，（公財）横浜観光コンベンションビューロー，横浜市役所文化観光局，横浜市教育委員会，川崎市教育委員会，神奈川県教育委員会，神奈川県立青少年センターのご協力により，横浜市内の市役所，区役所，図書館，県立青少年センターなど公共施設，横浜・川崎市立の小・中学校・高等学校（横浜市内は私立を含む），神奈川県立高校にチラシの配架とポスター掲示を行うことができた。幅広い広報の結果，参加者は小学生からシニアまで幅広い層となった。市民講演会での講演をご快諾いただいた講演者の皆様と開催に当たってご尽力いただいた皆様にお礼申し上げる。

総括

本年度の年会は横浜国立大学が会場であったものの，所属の会員だけでは実施は困難であり，近隣の研究機関に所属する会員がLOCに加わっていただくことにより初めて実現できたと考えている。本年度の年会実行委員会は，小林憲正，津野宏，癸生川陽子（以上，横浜国大），仙田量子，本多牧生，川口慎介（以上，海洋開発研究機構）青野真士，北台紀夫（以上，東京工業大学）の8名の構成で，業務分担を行って運営してきた。準備期間を通じて，石橋純一郎企画幹事（九州大）とは密に連絡をとることで，さまざまな助言いただくことができ，安心して準備を進めることができた。前年度，年会実行委員会の堀川恵司会員（富山大）からは，直近の学会運営の経験から有用な情報をいただけた。人のつながりによってこの年会が無事に開催できたと考えている。それでも，LOCと評議員会（幹事会）との情報伝達が不足している部分もあり，会員諸氏にご迷惑をおかけしたことをおわび申し上げる。今後の年会運営では，LOCと評議員会（幹事会）との間での情報共有が必要であると考えている。

財務面では（公財）横浜観光コンベンションビューローの横浜MICE応援プランにより，参加者400名の国内学会開催として，ポスターボードのレンタル・設営費と懇親会後のバス借り上げ費の全額支援，コンベンションバックの提供を受けたことは大きな助けとなった。さらに，横浜国立大学の共催による施設利用費の減免，企業展示の収入，そして，なによりも多くの参加者を迎えることができたことで，年会の財務は，年会本会（市民講演会開催も含む），懇親会ともにそれぞれ健全なものであったことをご報告する。本年は首都圏開催であったこともあり，招待講演が17件と比較的多かった。各研究分野の活性化のために招待講演をセッションに組みこむことは，大変意義があることだとLOCとしても考えているが，年会財務の点から見ると，参加費が無償であることが厳しい運営をLOCに強いることにつながってしまう。他にも学会の方針で招待とされる方が年々増加しており，本年会参加者から出展企業の参加者を除いた404名のうち，招待として参加費を免除されたのは26名であった。本年はさまざまな支援を受けたこともあり，財務上の問題が生じなかったが，招待講演等の参加費については，年ごとに対応が異なる様な事態は望ましくないので，今後はLOCの自助努力のみに任せるのではなく，どのように取り扱うのが良いのかを学会からの補填なども含めて，評議員会でのご検討をお願いしたい。

昨年の地球惑星科学連合大会，来年のゴールドシュミット2016がともに横浜開催であることから，年会・懇親会の参加者が伸び悩むのではないかとの不安がある中で準備を進めていたが，会員諸氏のご協力により，年会，関連イベントともに盛会に終えることができたことで，LOC一同，感謝の念を抱くと同時に安堵している。

謝辞

年会開催に当たり，国立大学法人横浜国立大学，日本鉱物科学会，日本化学会，日本分析化学会，日本地質学会，日本質量分析学会には共催を，公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー（YCVB）からは後援をいただきました。年会運営にご協力いただきました川幡会長をはじめ，学会評議員の皆様，セッション構成にご尽力いただいたコンビーナーの皆様に心よりお礼申し上げます。（公財）横浜観光コンベンション・ビューローからのご支援は年会財政上大きなものでした。また，企業展示をしていただいた11社のご協力により，年会の財政基盤は安定したといえます。この場を借りて，各社のご芳名を紹介するとともに，改めてお礼申し上げます。来年度も年会へのご協力をよろしくお願いいたします。
三洋貿易株式会社科学機器事業部
安井器械株式会社
ジャスコインタナショナル株式会社
紀本電子工業株式会社
サーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社

SIサイエンス株式会社
イー・エス・アイ・ジャパン株式会社
株式会社エス・ティ・ジャパン
アイリックス株式会社
株式会社バイテック
Nu Instruments Japan株式会社
（以上，11社）

最後になりますが，年会は参加者があってこそのものであります。2015年度日本地球化学会にご参加いただいた皆様に心よりのお礼を申し上げます。ぜひ，来年度も大阪市立大学での年会にお集まりいただけますよう，お願い申し上げます。

（日本地球化学会年会実行委員・津野　宏）

●第10回　日本地球化学会・日本鉱物科学会合同ショートコース報告書

2015年9月15日（火）に横浜国立大学教育人間科学部講義棟にて第10回ショートコースを開催した。セミナーには，日本地球化学会学生会員9名，非会員8名（内訳：学部3名，修士7名，博士3名，ポスドク・研究員・教員10名），講師5名に加え，今年はショートコース世話人の引き継ぎを行うため，新世話人7名が参加し，参加者合計は28名であった。今年のショートコースは，地球科学の広い分野をカバーする4つの学術講義と，研究推進に不可欠な基礎教養の涵養を目的とした講演の計5つの講義から構成した。学術講演の講師は，小宮　剛先生（東京大学），福山繭子先生（秋田大学），川口慎介先生（海洋研究開発機構），上野雄一郎先生（東京工業大学），斉藤恭一先生（千葉大学）であり，それぞれ，地質学から紐解く生命進化（小宮），トラディショナルからノントラディショナルな同位体地球化学（福山），海洋地球化学の本質を理解するためのヒント（川口），東工大ELSI研究所が進める生命進化研究戦略（上野）を講演していただいた。基礎教養に関する講演では，理系英語のコツ（論文作成の六法全書：書けてなんぼの理系英語）を講演いただいた（斉藤）。講演時間60分にくわえ，質疑応答に10分を充てたが，参加者から多くの質疑・議論により，プログラム進行が30分以上も遅延するほどであった。

会場準備や設営に関して，第62回日本地球化学会年会実行委員長小林憲正先生，津野宏先生ほか日本地球化学会年会LOCの方々にお世話になった。またショートコース運営等では，京都大学大学院・服部健太郎さん，山方優子さん，槇納好岐さん，大林秀行さんの支援をいただいた。さらにAgilent Technology社様からはトートバッグと三色ペン，メモ帳を参加者全員に寄贈いただいた。ここで感謝したいと思います。

ショートコースの主旨

地球化学は，試料を構成する元素，同位体，化学種の存在度，分布，移動，変化を空間的・時間的に調べ，それらを支配する法則や原理を見いだすことにより，地球や惑星を構成する物質の構造や循環を調べる学問である。分析・データ解析技術の進歩により，試料から得られる地球化学的知見の質と量は飛躍的に向上し，今では，鉱物学，岩石学，地質学，地球物理学など，他の地球科学分野の発展を支える重要な学問となっている。しかしその一方で，地球化学の応用性・実用性のみが注目され，地球化学の本質である現象の素過程を調べる研究が少なくなるとともに，時間をかけてじっくり調べ，問題点を徹底的に掘り下げて理解する機会も減少するという問題も顕在化している。こうした問題に対し，日本地球化学会では地球化学講座の発行を通じて地球化学の啓蒙を進めてきた。そして日本地球化学会では，次なる啓蒙活動として，大学生・大学院生を対象とした「ショートコース」を年会に合わせ開催することとした。本ショートコースでは，地球化学を研究する上で必須となる基礎知識の包括的修得と，最先端研究に触れることによる視点の拡大，という次の二つの目標を掲げ，将来の地球化学を担う若手研究者の育成を目指す。第10回目を迎えた今年は，地球化学と環境科学，海洋化学，固体地球化学，生命の誕生と進化といった学術研究の最前線を紹介する。また，英語学術論文を執筆する上で重要となる最も重要なルールをまとめた講義も盛り込んだ。この講義では主として英語論文の執筆法を取り扱うが，内容的には日本語での学術論文執筆にも共通した重要な要素を含んでいる。学生，若手研究者だけではなく，研究歴の長い研究者に対しても意義のあるショートコースとなった。

第10回日本地球化学会ショートコースプログラム

【はじめに】誰も眠ってはならない
平田岳史（京都大学）
【講演1】地球・生命進化と地球化学
小宮　剛（東京大学）

【講演2】地球化学におけるMC-ICP-MSの適用―トラディショナルからノントラディショナル同位体まで
福山繭子（秋田大学）
【講演3】海の地球化学とその向こう側
川口慎介（海洋研究開発機構）
【講演4】地球型惑星で生命起源
上野雄一郎（東京工業大学）
【講演5】理系英作文の六法全書
斎藤恭一（千葉大学）

(1) 開催日時・場所
日時：2015年9月15日（火）午前9時30分～午後5時45分
会場：日本地球化学会2015年年会会場（横浜国立大学）教育人間科学部講義棟301号室（F会場）

(2) 会計報告
収入は参加費のみである。本ショートコースの参加費は，日本地球化学会学生会員が1,000円，学生会員以外・非会員は3,000円とした。参加者には1,000円相当の昼食を提供するので，学生会員は実質的に参加費が無料となっている。主な支出は，昼食代金に加え，講師料（一人あたり10,000円，5名分）であった。講師料は小宮氏，福山氏，川口氏，上野氏，斉藤氏の5名に支払った。会計収支表を以下に示す。

第10回ショートコース会計報告

1. 収入の部

参加費	人数	単価	小計	
日本地球化学会学生会員	9	1,000円	9,000円	
一般会員、非会員	8	3,000円	24,000円	
途中参加（午後から）	1	1,000円	1,000円	昼食代のみ
来年度以降の世話人	5	1,000円	5,000円	昼食代のみ
日本地球化学会からの補助			37,750円	
		合計	75,750円	

2. 支出の部

	人数	単価	小計
講師謝金	5	10,000円	50,000円
昼食弁当	25	1,030円	25,750円
		合計	75,750円

(3) 来年度のショートコースに向けたアンケート結果（参加者28名中10名が解答）
(a) 講演時間について：このままでよい（4名），もう少し長く（1名），もう少し短く（1名），休憩を入れて欲しい（1名），討論の途中で自由に質問できるのはよかった（1名）
(b) 関心のあるテーマ（複数回答可）：海底熱水鉱床（2名），生命の起源・進化（2名），初期地球・初期地球環境（2名），同位体（1名），固体地球化学（マントル，核）（1名），物質循環（1名），地球年代学（1名），XAFSについて（1名），西ノ島に関わる岩石や生態系など最近の研究（1名），生体金属の話・生物学（1名），微生物学（1名），地球史（1名），重元素安定同位体地球化学（1名），宇宙化学（1名），有機地球化学（1名），海洋学（1名），固液界面化学（1名），軽元素安定同位体地球化学（1名），科学史・技術史（1名），気候変動（1名），系外惑星（1名），物質循環（1名）
(c) 聞いてみたい講師：平田岳史（2名），浦辺徹郎（1名），大野剛（1名），中村仁美（1名），古川善博（1名），田中宏幸（1名），上野ふき（1名），田村芳彦（1名），大河内直彦（1名），橘省吾（1名），広瀬敬（1名），丸山茂徳（1名），関根康人（1名），小畑元（1名），福士圭介（1名），宗林由樹（1名），藤井俊行（1名），玄田英典（1名），佐々木貴教（1名）
(d) 参加費について：安くて良い（4名），会員・非会員間での差別化はよい（1名），学生にも参加しやすい設定だった（1名），非会員なので3,000円払ったがそれ以上の価値があった（1名），さらに安くできるかもしれない（例えば弁当を無くす，配布資料をなくす等）（1名），これだけ安いのだから参加者がもっと増えても良いはず（1名）
(e) 所属学会（複数回答可）：地球化学会学生会員（3名），地球化学会一般会員（1名），日本地球化学会非会員（1名），日本地球惑星科学連合（5名），EGU（1名），放射光学会（1名），資源地質学会（1名），入会している学会なし（1名），現在は入っていないが日本鉱物科学会，日本地質学会，日本火山学会などへの加入を検討している（1名）
(f) ショートコース終了後の新しい企画・要望：プレゼンテーション関係の講演は今後も続けて欲しい（1名），参加者が少なすぎる（1名），興味がある分野や今まで知らなかった分野の講義が聞けたのが良かった（1名），講演者の先生方がなぜその分野に進まれたのかを（研究の前段）を簡単に紹介してもらえると嬉しい（1名），講演内容の簡単な要約（数行程度）を年会HPに掲載

して欲しい（事前に内容を知ることで当日の理解が深まるため）（2名），自分の研究発表よりも，基本的な知識の拡充やその分野のレビューなどの話に重心に置く方がいいと思った（1名），英語論文の書き方のような講義の中に科学技術史などの学問の発展の歴史を俯瞰するようなものがあったらよかった（1名），今回は学部1年生2名が参加していたので，もっと学部学生（年会開催地近郊）に対して案内を出すべき（1名）

以上となります。ご協力，有り難うございました。

（京都大学　平田岳史）

学会からのお知らせ

●長尾敬介会員の韓国での活躍：東亜日報に報道

長尾敬介会員（東京大学名誉教授）は，退職後，韓国極地研究所のブレインプール研究員として研究を続けられているが，その活躍の一端が韓国最有力紙の一つ，東亜日報に報じられた。以下の紹介は，韓国地質資源研究院　地質部惑星地質研究グループ先任研究員小林敬生博士による紙面の和訳に基づき，田中が翻案したものである。

東亞日報

2015년 09월 03일 (목)
32면 오피니언

열린 시선

'한일 과학교류의 장' 나가오 우주물질 연구 실험실

東亜日報　2015年9月3日（木曜日）第32面より翻案

「韓日科学交流の場」長尾宇宙物質研究実験室

韓国と日本の間に，政治的には様々な問題が渦巻いているが，科学の面では，両国の関係を明るい未来に向かわせる出来事が続いている。

先日，インチョンのソンドにある海洋科学技術院付属極地研究所，地質・隕石研究室で新しい実験室開所行事が催された。宇宙物質研究科学界では大変重要で意味のある開所式だった。極地研究所のブレインプール研究員である長尾敬介前東京大学教授（66）が，宇宙物質生成起源研究の必須施設である希ガス同位体分析実験室を国内で初めて作ったからだ。彼は，東京大学と岡山大学でずっと大切にし，研究に重用していた実験施設をまるごと移して来たのだ。ついに，国内でも希ガス同位体分析施設が設置され各国の研究者が訪れる世界的実験室が開かれたのだ。韓国は宇宙物質隕石1号トゥウォン隕石やチンジュ隕石，南極大陸で収集した隕石を多数保有する。これらの隕石と地球外物質に隠された宇宙の秘密を明かす重要な研究施設を備えて，宇宙物質先端研究にも一足歩みを進めたのだ。

長尾教授はヘリウム，アルゴン，ネオン等，希ガス同位体を分析する宇宙物質専門家だ。彼は，日本が野心にあふれ推進する小惑星探査船「はやぶさ」の小惑星物質起源研究の核心メンバーでもある。「はやぶさ」が2010年持ち帰った「イトカワ」表面物質の希ガス同位体分析を通じ，その表面物質が宇宙風化で少しづつ放散し，10億年すれば小惑星自体が消滅するであろうという事実を初めて明らかにした。彼は，年中365日実験室で研究していた，ノーベル賞強国の典型的な大学教授だ。また，彼の実験室移設は，2007年に岡山大学の日下部實教授が極地研究所に日下部実験室を作ってから2番目になる。日下部実験室は宇宙物質の酸素同位体を分析・実験している。

21世紀は宇宙科学時代だ。米国航空宇宙局（NASA）は遠い宇宙へ出て行く「ニューホライゾン」を発射，9年6ヶ月の後に冥王星に接近，通過しながら驚くべき新しい情報を提供した。韓国航空宇宙研究院も去年小型衛星発射体の「ナロ号」の発射成功以降2020年大韓民国最初の月探査船発射を準備している。韓国建設技術研究院，韓国地質資源研究院，韓国科学技術院も宇宙探査ロボットと探査装備の開発研究に力を注いでいる。

実験室開所により同位体分析技術の国内伝授と韓日科学交流の開かれた場が作られた。一人の科学者の国境を越えた温かな科学愛が凍りついた韓日関係を融かし出す触媒となるよう祈っている。また，日下部実験室，長尾実験室につづき，第3，第4の実験室が引き続き誕生し，世界的な宇宙科学研究センターとして成長し発展することを願っている。

김 규 한

한국지질자원연구원장·이화여대 명예교수

金奎漢　韓国地質資源研究院・梨花女子大学名誉教授

この記事には，長尾敬介会員の活躍を報じる内容に加え，もう一つの思惑がうかがえる。

執筆者の金奎漢氏は，韓国地質資源研究院の院長（日本の産業技術総合研究所地質調査所に相当する機関の長）である。韓国は，宇宙開発とくに月探査に力をいれ，韓国建設技術研究院，韓国地質資源研究院，韓国科学技術院は，研究連合組織を画策していた。このニュースは，その最中に流されたものである。米国では，大学教授などが大統領に手紙を出したり，新聞に意見広告を出すことがよくあるが，この記事には，まさにその効能をも期待したことがうかがえる。日本の学会に期待されている事も大きく膨らみつつあろう。

（名古屋大学　田中　剛）

●第2回日中シンポジウム実施報告

第2回の日本地球化学会とChinese Society of Mineralogy, Petrology and Geochemistry（中国鉱物岩石地球化学会）との合同フォーラムが2015年9月23日に北京の中国国立コンベンションセンターで開催されました。このシンポジウムの目的は，両学会の科学的な交流の促進を目指すものです。昨年，富山大学で張勁先生のご尽力の下，両学会のMOUに基づき第1回の日本地球化学会と中国鉱物，岩石，地球化学会との合同フォーラムが開催されたため，今年は和やかな雰囲気の下での開催となりました。日本地球化学会より7名の方が，中国側より9名の方が英語で講演を行い，実りある議論ができました。来年Goldschmidt conferenceが横浜で開催されることもあり，次の開催地は未定ですが，近い将来，第3回目のフォーラムを開催される予定です。新しい試みとして，今回は両学会より同じ分野の若手2名づつが参加し，今後交流を継続していくこととなりました。次回も同様な感じで運営できればと考えており，十数年後には，十年間以上交流のある若手が二十人以上となり，歴史が増すにつれ，交流の幅や深さも広がると期待されます。今回は，中国鉱物岩石地球化学会がホストとしてご尽力されましたが，特に，Congqiang LIU先生，Ruizhong HU先生，Yun LIU先生に大変お世話になりました。ここに感謝の意を表する次第です。

（東京大学　川幡　穂高）

［講演リストは以下のとおりです］

Ruizhong Hu（Chinese Society of Mineralogy, Petrology and Geochemistry会 長，Chinese Academy of Sciences）

Opening Remarks

Hodaka Kawahata（日本地球化学会会長，東大）: Environments experienced by our ancestors: the dispersal of Homo sapiens, immigration to Japanese islands and pollution at an ancient capital city

Yong-Fei Zheng（University of Science and Technology of China）: Geochemistry of continental subduction-zone fluids

Katz Suzuki（JAMSTEC）: Massive volcanism and its environmental impact elucidated by the Os isotope and PGE abundance

Wei-Dong Sun（Chinese Academy of Sciences）: The formation of the Bayan Obo deposit, an isotope perspective

Naohiro Yoshida（日本地球化学会前会長，東工大）: Isotopic characterization of nitrate and sulfate aerosols with special reference to mass independent fractionations

Yun Liu（Chinese Academy of Sciences）: Theoretical calculations of isotopic fractionations caused by the nuclear volume effect

Shinsuke Kawagucci（JAMSTEC）: Experimental approach for stable isotope diagnosis on origin of methane

Yang-Ting Lin（Chinese Academy of Sciences）: Habitability of Mars: Evidence from NanoSIMS Analysis on Martian Meteorites

Hikaru Yabuta（大 阪 大）: Association of organics-water-minerals in the early Solar System: Molecular comparison between hydrous and anhydrous Antarctic micrometeorites

Li-Ping Qin（University of Science and Technology of China）: No Cr isotopic fractionation between chondrites and Earth, and the cosmochemical and geochemical significance

Harue Masuda（大阪市大）: Arsenic and lead transportation in Red River in Vietnam territory

Xin-Bin Feng（Chinese Academy of Sciences）: Mercury Mining in Guizhou and its Environmental and Health Impacts

Jing Zhang（富山大）: What can we learn from ocean tracers: GEOTRACES, from the global to the

Asian marginal seas
Jing-Ling Ren（Ocean University of China）: Cross-shelf Transport of Terrestrial Al Enhanced by the Transition of Northeasterly to Southwesterly Monsoon Wind over the East China Sea
Cong-Qiang Liu（Vice President of National Science Foundation of China; Academician of Chinese Academy of Sciences）
Closing Remarks

●日本地球化学若手シンポジウム2015実施報告

日本地球化学会「鳥居基金」の助成を受けて，日本地球化学若手シンポジウム2015を開催しましたので報告いたします。今年度は東京都八王子市にある大学セミナーハウスにて，9/18～20のスケジュールで行いました。今回は「質問しよう」をテーマとし，例年行っている招待講演やポスター発表の他に，講師のご講演に対する質問を考えるグループワークや，質問時間を長く設定した口頭発表を交えたプログラムを企画しました。当日は学部生から大学講師まで総勢42名の方にご参加いただき，分野だけでなく世代も超えた交流を行うことができました。

招待講演には高橋嘉夫先生（東京大学）をお招きし，原子とイオンの性質に基づいて地球システムのマクロな現象の理解を目指す「分子地球化学」の魅力についてお話いただきました。「質問しよう」を全員が意識しながら，非常に集中して講演を聞いている姿が見られました。直後に行ったグループディスカッションでは，各グループがベスト質問賞を目指し，制限時間を大幅に超過する熱の入った議論となりました。特別講演では，論文作成の指南書を出版していらっしゃる東北大学の酒井聡樹先生をお招きして，論文書き方講座を行っていただきました。今回はイントロダクションとタイトルの書き方に関するお話が重点的でしたが，論文執筆経験の無い人に限らず大変勉強になる内容でした。参加者同士の口頭・ポスター発表を通しては，一部ではまだなかなか質問できないという感想も聞かれましたが，今回のシンポジウムをきっかけとして，まず質問を意識しながら能動的に話を聞くことの重要性を実感できたと思います。最終日には，ジャスコインタナショナル株式会社にご協力いただき，地球化学に関連した分析装置を見学・体験するラボツアーを行いました。今回は同位体比質量分析計（IRMS）と走査型電子顕微鏡（SEM）を見学しましたが，初めての人はもちろん，経験者も改めて学ぶことの多い会となりました。

シンポジウム開催にあたって，実行委員として運営に協力してくださった先輩方，素晴らしい講演を用意してくださった先生方，ラボツアーを企画してくださったジャスコの皆様，そして当日の参加者の皆様の

おかげで，成功裏に終えることができました。また，会議施設利用費や，遠方旅費援助等，参加者の参加費のみで賄うことが難しいものも多々ありましたが，鳥居基金の援助によって無事に全ての準備を調えることができました。皆様のご協力があってシンポジウムが開催できたことを，この場を借りて厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

（東京工業大学　石野咲子，青山慎之介，服部祥平，
東京大学　渡辺勇輔，富山大学　神林翔太，
北海道大学　滝沢侑子）

集合写真
上・中：セミナーハウスにて，下：ジャスコインタナショナル株式会社にて

●Goldschmidt国際会議2015参加報告

第25回ゴールドシュミット国際会議は，2015年8月16日から21日までの6日間，チェコ共和国プラハで開催されました。この会議はヨーロッパ地球化学連合（European Association of Geochemistry, EAG）と米国地球化学会（Geochemical Society, GS）が主催，日本地球化学会（GSJ）やその他の関連学会が共催する国際学会で，地球化学関連では参加者数が最大規模の学会です。開催地であるプラハは2012年に開催して以来2度目の開催で，世界遺産に登録されている古いヨーロッパの街並みが印象的な落ち着いた街です。学会は小高い丘の上にあるPrague Congress Centerで開催されました。

今回のゴールドシュミット国際会議は，26のテーマに1つから11のセッションがぶら下がっており，記念すべき25回目ということで，各テーマで過去25年の間の歴史やブレークスルーとなった研究についてハイライトされた特別セッションもプログラムされていました。また，メンター＆メンティー制（ほぼマンツーマンで学生や若手研究者とシニア研究者がグループを組み，期間中に食事を共にしながら様々な相談事にアドバイスをするという制度）が導入されるなど，これまで以上に学生や若い研究者を対象としたイベントやワークショップが実施されていました。

ゴールドシュミット国際会議の参加人数は増加の一途をたどり，今年は人気のヨーロッパ，プラハということで，一昨年開催のイタリア・フィレンツェ大会に匹敵する4000名ほどの参加者のマンモス会議となりました。ポスター会場は展示会場と共通でしたが，会場となったExhibition Hallが大変広かったため，見学者が多いポスターでもまったく窮屈さを感じませんでした。日本地球化学会のブースは主催者であるGSおよびEAGの隣と，最も人の往来が多い良い場所に設置され，横浜で開催されるGoldschmidt2016の宣伝に大変効果的でした。

日本地球化学会ではPR活動の一環として毎年本会議でブース展示を行い，GJのCD-ROMや冊子体を無料で配布しております。今年もパンフレットに加え，地球化学会のロゴ入りボールペンやゴールドシュミット2016横浜のポスターの掲示や横浜の街を紹介するパンフレット等の配布を行いました。ブースには日本の研究機関や大学でのポスドクとして研究をしたい若手研究者や，海外の研究機関に在籍する在外会員，日本に留学経験のある研究者が訪ねてきてくれました。毎回のことですが，今回も情報交換の場として，また待ち合わせ場所として多くの方々に利用していただきました。

今年のGJ賞の受賞論文は，Sugahara, H. and Mimura, K.の“Glycine oligomerization up to triglycine by shock experiments simulating comet impacts, Vol. 48（No. 1）, pp. 51–62,（2014）でした（写真参照）。筆頭著者の菅原春菜会員に川幡会長ならびに圦本GJ編集委員長から賞が授与されました。ま

た記念講演も非常に好評を博し，BBCなど各国マスメディアの取材が入るなど，大きな注目を浴びる事となりました。心より受賞をお喜び申し上げます。

来年のゴールドシュミット会議はいよいよ横浜にて6月26日から7月1日までの開催となります。準備もそろそろ佳境となり，現在プログラム委員会においてセッションの選定が進んでおります。横浜での会議を盛り上げるためにも是非とも多くの会員の皆さまの参加をお待ちしております。

（広報委員会ゴールドシュミット担当
原田尚美，山下勝行）

写真1　GJ賞受賞者菅原春菜さんの記念撮影
（左から川幡穂高日本地球化学会会長，
菅原春菜さん，坏本尚義GJ編集委員長）

●2016年度学会賞等受賞候補者推薦および第1回鳥居基金助成の募集

2016年度学会賞等受賞候補者の推薦および第1回鳥居基金助成を募集いたします。締切は，2016年1月31日となっております。書類の受付は「電子メール」になりましたので，ご注意下さい。

（1）2016年度「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」受賞候補者推薦の募集

日本地球化学会規定により，柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては，下記をご参照の上，会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を，自薦他薦を問わずご推薦下さいますようお願いいたします。

候補者の資格：

（柴田賞）地球化学の発展に関し，学術上顕著な功績のあった者。

（学会賞）地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

（奨励賞）地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし，なお将来の発展を期待しうる本会会員。受賞者の年齢は，2016年4月1日において満35歳未満である（誕生日が1981年4月2日以降である）ことを要する。

（功労賞）我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し寄与のあった者，または団体。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：学会ウェブサイトからダウンロードした推薦書に記載し，2016年1月31日までに「電子メールで」下記に提出する。

http://www.geochem.jp/prize/index.html

提出先：

橘　省吾（庶務幹事）

e-mail: affairs＠geochem.jp（@を半角にして送信下さい）

書類を受領しましたら，3日以内にメールでご連絡を差し上げます。万一，受領の連絡がない場合はお知らせ下さい。

選考は「学会賞等受賞者選考委員会」が行い，評議員会にて受賞が決定次第，推薦者にご連絡差し上げます。授賞式は年会時の総会後に行い，受賞者には受賞記念講演をしていただきます。

この件についてのお問い合わせは，本会庶務幹事・橘　省吾までお願いします。

（2）2016年度第1回鳥居基金助成の募集

2016年度第1回鳥居基金助成の応募の締め切りは，2016年1月31日となります。本学会ウェブサイトに応募要項がありますので，ご参照の上，応募書類を提出して下さい。なお，今回の助成の対象は，2016年4月から2017年3月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますので，ご注意下さい。

http://www.geochem.jp/prize/torii.html

申請手続：

応募者は，学会ウェブサイトからダウンロードした申請書（（1）－Aまたは（1）－B）を，所定の期日までに「電子メールで」下記に提出して下さい（今回より申請書の様式が改訂されました）。参考となる資料（海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等，国内研究集会については集会の案内・概要等）を添付してください。なお，海外渡航により国際学会等での研究発表を行う場合は，申請書の「研究の概要・経費の支援を必要とする理由」欄に，渡航にあたっての抱負や発表する論文の内容・重要

性，なぜ鳥居基金の補助を必要とするかについて記載して下さい。また，海外派遣に関しては，他のいかなる研究助成金との重複受給（合算使用を含む）は認められておりませんので，ご注意下さい。

提出先：

橘　省吾（庶務幹事）

e-mail: affairs＠geochem.jp（@を半角にして送信下さい）

書類を受領しましたら，3日以内にメールでご連絡を差し上げます。万一，受領の連絡がない場合はお知らせ下さい。

選考は「鳥居基金選考委員会」が行い，採択者には3月末を目処に，電子メールで採択通知を送付いたします。不採択者にご連絡は差し上げておりませんので，ご了承下さい。

この件についてのお問い合わせは，本会庶務幹事・橘　省吾までお願いします。

書　評

「地球環境システム―温室効果気体と地球温暖化―」（中澤高清，青木周司，森本真司著，共立出版，2015年5月発行，277ページ，￥3,800（税込））

本書は現代地球科学入門シリーズの第5巻として発行された（なお，同シリーズの第12巻に本会会員の佐野有司氏・高橋嘉夫氏による「地球化学」がある）。タイトルからは広範な事象を扱っている印象を受けるが，副題が示すように，温室効果気体の循環と気候変動の関わりについて大学の学部生と大学院生向けに解説した書である。地球温暖化問題は今や社会に広く認知されているが，2009年のいわゆるクライメート・ゲート事件の際に特に強まった懐疑論もいまだに散見される。「温室効果気体について総合的かつ系統的に扱った教科書は，わが国においてはほとんど見当たらない」ことに動機を得て執筆された本書は，温室効果気体に関する揺るぎない観測事実を示し，温室効果気体と地球温暖化との関係を理路整然と教えてくれる。筆頭著者の中澤氏はわが国における温室効果気体の観測研究の草分けであり，共著者をはじめとして多数の優秀な研究者を育てて質の高い観測データを世に発表し続けておられる。

第1章「序論」では温室効果気体の発見に始まる地球温暖化研究の歴史が述べられている。日本では宮沢賢治が最初に温室効果に言及したことなど興味深いエピソードも紹介されている。第2章「気候の維持・変動における温室効果気体の役割」では地球の放射エネルギー収支に関する基礎的事項が解説されている。これはIPCC（気候変動に関する政府間パネル）の報告書概要の内容にほぼ対応しており，日本語で容易に理解することができて重宝する。第3章「温室効果気体の測定」では，主として二酸化炭素について，濃度および安定・放射性炭素同位体比の測定法が説明されている。

第4～6章で過去（数十万年前まで）および現在の二酸化炭素，メタンおよび一酸化二窒素の変動と循環が詳細に解説される。特に第4章「二酸化炭素の変動と循環」は圧巻で，本書の1/3に迫る85ページが割かれ，大気や海洋表層中の二酸化炭素の濃度の分布と経年変化および季節変動，二酸化炭素と表裏一体の関係にある酸素の大気中濃度，炭素安定同位体比の変動など長期間にわたる高精度・高確度の観測データが惜しみなく紹介されている。これらのデータがボックスモデルや最新の全球3次元大気輸送モデルによる解析にどのように活用されているのか，数式を追って理解できるように配慮されており，大気，海洋，陸上生物圏の間での炭素の収支がどこまでわかってきたのかが手に取るようにわかる。第5章「メタンおよび一酸化二窒素の変動と循環」および第6章「氷床コアから復元された二酸化炭素，メタン，一酸化二窒素の変動」においても基礎から最新の知見までが明快に解説されているが，第4章と比べて分量は抑えられており，これらの項目に関する観測研究を今後加速する必要性を感じさせる。

全体を通じて，学術用語や海外の組織・機関の略称を丁寧に説明していること，外国の地名・人名をカタカナ表記して読みやすくしていることなど，教科書として利用するための気配りが行き届いている。一方，268もの文献が引用，リストされており，研究者レベルの読者が原著論文にアクセスして理解を深めるのにも便利である。

本書で学んだ学生諸氏の中から温室効果気体の研究に携わる人材が育ち，本書の内容を書き換えるような成果を出してくれることを期待したい。

（東京工業大学　豊田　栄）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メールでの原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2016年3月頃を予定しています。ニュース原稿は2月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会広報幹事・ニュース担当）

原田尚美
〒237-0061　神奈川県横須賀市夏島町2-15
海洋研究開発機構（JAMSTEC）
地球環境変動領域
Tel: 046-867-9504; Fax: 046-867-9455
E-mail: news-hp@geochem.jp

薮田ひかる
〒560-0043　大阪府豊中市待兼山町1-1
大阪大学大学院理学研究科
宇宙地球科学専攻
Tel: 06-6850-5497; Fax: 06-6850-5480
E-mail: news-hp@geochem.jp